12 December 2006

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.153

CONTENTS

Ⅰ　教育学部130周年記念事業　2

Ⅱ　特集　現在の弘大・弘大生について
　　ー職員の視点から　4

Ⅲ　総合文化祭報告 12

Ⅳ　海外だより 14

Ⅴ　海外留学報告 16

Ⅵ　研究室等の紹介 22

Ⅶ　新任教員自己紹介 26

Ⅷ　けいじばんコーナー 27

Ⅸ　編集後記 27

制作　教育学部学生　古川奈津子

特　集

「現在の弘大・弘大生について
ー職員の視点から」

Ⅰ　教育学部130周年記念事業

世代をつなぎ未来に向けて進もう！

―弘前大学教育学部創立130周年記念事業―

弘前大学教育学部創立130周年
記念事業実行委員会委員長

教育学部副学部長

星　野　英　興

平成17年初夏：「明治９年創設の青森県師範学校を前身とする弘前大学教育学部は、平成18年に創立130周年を迎えることになる。記念行事をしては？」という話が持ち上がった。100周年記念行事も行っていなかった教育学部にとっては、晴天の霹靂ともいえる衝撃であった。

平成17年夏休み：青森県師範学校同窓会長と佐藤教育学部長とのトップ会談を機に、教育学部が関係同窓会と協力して創立130周年記念事業を実施する体勢が固まった。

記念ロゴマーク

平成17年暮れ：教育学部教職員と同窓会関係者で構成された準備委員会で、記念行事を平成18年９月30日に行い、弘前大学長、青森県教育委員会及び弘前市教育委員会の教育長を主賓とすることが決まった。

平成18年３月：準備委員会から実行委員会へ衣替えし、「130年を振り返って－そして未来へ－」のテーマのもと、教育学部学生永井佑季さんの作品を創立130周年記念ロゴマークに選定した。附属小学校６年生による師範学校校歌斉唱（指導：三浦教諭）と浅野教員の尽力で特別編成される「130周年記念オーケストラ」の演奏が、記念式典に彩りを添えることになった。

佐藤三三教育学部長の式辞とご来賓の皆様

平成18年８月：７日付け東奥日報朝刊に「130周年記念事業」の広告が掲載された。弘前大学後援会、教育学部同窓会及び教育学部特別教科（看護）教員養成課程同窓会より寄附金をいただいた。

平成18年９月：20日までに、弘前大学出版会から130周年に因んだ「青森師範学校志」及び「転換の時代の教師・学生たち」が相次いで上梓された。

平成18年９月30日（土）：好天のもと弘前大学教育学部創立130周年記念行事が執り行われた。午前11時からは教育学部西側で「130周年記念庭園開園式」及び「師範学校校歌歌碑除幕式」が、午後１時からは創立50周年記念会館みちのくホールにおいて「弘前大学教育学部創立130周年記念式典」及び「記念コンサート」が、また午後４時半からは弘前大学・大学会館において「記念祝賀会」が挙行された。午前11時からは創立50周年記念会館エントランスホールで、

青森県師範学校同窓生有志による校歌斉唱

15の「パネル展示」と貴重な資料が公開された。記念式典には約220名、記念祝賀会には約160名が参加され、記念パンフレット「弘前大学教育学部の130年－そして未来へ－」が皆さんに渡された。また、歌碑の除幕式では、師範学校同窓生有志の皆様が校歌を若々しく斉唱された。

ファンファーレと附属小学校６年生126名による「師範学校校歌」斉唱の後、齋藤尚子教員の司会で記念式典の幕が開き、第一部では佐藤学部長の式辞、遠藤弘前大学長、田村青森県教育委員会教育長及び石岡弘前市教育委員会教育長の祝辞に引き続き、寄附金に対する感謝状贈呈が行われた。第二部では「『教員養成の今昔』－世代をつなぐ－」と題して、同窓会代表４名による「戦前・戦中・戦後における体験談」、北原副学部長による「教育学部の新たな取組」、永井さんからは「ロゴマークに込めた思い」が話された。

教育学部附属小学校６年生による青森県師範学校校歌斉唱

教育学部関係者30名を含む総勢46名編成の「130周年記念オーケストラ」（指揮：和田教員）とピアノ（浅野教員）による記念コンサートは、参加された皆様にご満足を頂いた。山内ＲＡＢアナウンサー（教育学部卒業生）の司会で始まった記念祝賀会では、同窓生によるユーモア溢れる往時のエピソード紹介や津軽三味線奏者笹川氏（教育学部卒業生）による迫力満点の演奏で、時の経つのを忘れるほどの盛会となった。

かくして９月30日は、参会された皆様とともに、来し方を振り返りこれからの教員養成を考え、「世代をつなぎ未来に向けて進む」教育学部の新たな門出を祝う記念すべき一日となった。最後になりましたが、本記念事業の実施に当たり、ご協力を賜りました多くの皆様に衷心よりお礼申し上げます。

130周年記念オーケストラによるピアノソナタ演奏

世代をつなぎ未来に向けて進もう！

Ⅱ　特集　現在の弘大・弘大生について－

「今、俺がいる場所」

総務部総務課広報・支援グループ
伊藤　譲

弘前大学の印象を一言で表すと、「洗練されている」。

第一に、キャンパスが整然としている。単に建物が新しくて綺麗、というのではなく、煙草の吸い殻等のゴミがほとんど落ちていない事に驚いた。学生、教職員双方の美化意識の高さが窺える。また学生の往来も適度に賑やかであり、私の大学時代に母校で毎日のように行われていた、ヘルメットを被った怪しげな連中が毎日のようにスピーカーを響かせて校内をデモ行進、等という不快な騒がしさはない。だからといって堅苦しい、という感じではなく、学生が教員に世間話や先輩への不満など、親しく雑談をしている光景を度々目にし、互いの距離の近さを感じた。

第二に、職場に無駄がない。節約意識が強く、コピーの裏紙を再び利用したり、枚数が多い時はより費用のかからない印刷機を用いるなど、紙一枚にも節約が徹底している。「今時その程度は当然だ」と思われるかも知れないが、私が以前勤務していた職場では、職場のゴミ置きスペースに廃棄文書やミスコピーの紙ゴミが毎日山のように積もっていたため（繁忙期には１m程の高さになることも）、本学の節約意識に衝撃を受けた。紙のみならず、職員の超過勤務についても「業務上、時間外労働の必要がある場合に命ずる勤務」という定義のもと、監督者による命令手続きが厳格に行われ、運用されている（少なくとも、私の所属する総務部ではそうである）。そのため勤務は原則として時間内に終わらせ、超過勤務はやむを得ない時に必要なだけ行う、という意識が徹底している。しかし自分さえ終わればよい、というわけでは決してなく、何かある時には係、役職関係なく、課全体で協力し合う。紙は惜しんでも力は惜しまない。

以上のような、節約はするがケチはしない職場、整然さと和やかさを併せ持つキャンパスから、洗練された空気と程よい緊張感を貰いながら、弘大での毎日を送らせて頂いている。

もっとも、貰ってばかりでも心苦しいので、これからは自分からも洗練された、それでいて和やかな雰囲気を醸し出せるよう、日々精進する所存である。

「今どきの弘大生は、これからの弘大生へ」

―財務部職員からの、卒業生の見た目、昔と今の弘大生、転勤職員の見た目―

財務部トゥェルブ

職員の視点、特に事務系職員の視点から見た「弘大、弘大生」についての寄稿依頼が財務部にありました。日頃あまり学生たちとの直接のお付き合いがない財務部としては、滅多にない良い機会を頂いたものと思いまして、三つの視点から弘大生に対する思いを述べることにしました。

なお、この原稿を作成するに当たり、財務部のうちの12名が関わったことから執筆者名を「財務部トゥェルブ」というペンネームにしました。

ところで、「財務部って何をしているところ」、との声も聞こえそうなので、この場をお借りして、ひと言で簡単に紹介させて頂きますと、「弘大の教育・研究・診療等に係る年間事業費約350億円規模の収支等に関わる業務をしております」ということになります。

１．卒業生の見た目

現在、財務部には５名の弘大卒業生が在籍しております、もちろんみんな優秀で弘大運営の一翼を担うべきものとして大いに期待されております。

この５名には、自分が弘大生として在学していた頃と今の学生の違い、望むことなどを述べてもらいました。

◎　私は平成14年卒の弘前大学の卒業生ですが、現在の弘前大学は私が在学していた頃と比べて、だいぶ構内の環境が良くなったと感じています。私が在学していた頃は、キャンパス内は自転車であふれ歩きにくく、各階の講義室毎に灰皿があり、休み時間等になると廊下は煙で充満していました。近年、駐輪場や歩道が整備され、歩きやすくなり、講義室毎に設置されていた灰皿も撤去されたため、学生のみならず、私たち職員も良い環境の中で働かせて頂いていると感じています。

◎　私は沖縄県出身ですが、四季折々に美しい青森の風土のとりこになって弘前に住んでいます。みなさんは20代前半の貴重な時期に、よくぞこの素晴らしい弘前大学を選ばれました！大学時代は、自己決定でなんでもできることに気がつきます。では、決定する際に何を最も尊重するのか？これは今後の人生で最も大切な軸になりますが、それを学ぶには都会の情報ではなく、自然と、いろいろな仲間と、自分の声を聞く時間が必要です。これらが弘前大学にはすべて豊かにあります。最近、学生が飲まなくなって西弘が寂れてきたとか。みなさん、バイトは最小限にして、仲間と酒を酌み交わしましょう！

◎　理学部が理工学部に変わった頃からだと思われますが、現在の弘大生の中に自転車を駐輪所以外の場所に置く学生が見受けられます。そのため、業者の車が重油の配達時にその自転車にぶつけてしまったことや、大ねぶたの出陣時に自転車を寄せた後にねぶた小屋から出すなどの事態も実際に起こっています。やはり、自分の都合ばかり考えるのではなく、周りのことも考える学生になってほしいです。

◎　学生の喫煙マナーの悪さが気になります。全面禁煙になった学部の周りには、吸い殻がとても落ちているという話を聞きます。この数年で学内の喫煙所が減ってきたことにより、喫煙者にとっては不便になったのは確かです。しかし、吸い殻をそのまま捨てるというのは間違っていると思います。この先学内が全面禁煙になった時、学内及び周辺の道路がどんなことになってしまうのか、とても心配です。

◎　他の担当の手伝いでしか学生に接する機会がありませんが、学生の持ってくる書類に記入漏れがあったり、添付書類がないという書類を数多く見ます。「子供じゃないんだからちゃんと記入要領読めよ」と思います。逆に自分が学生のときは事務職員に対し、面倒臭そうに応対する態度が目につき「そんなに嫌ならこの仕事やめろよ」と思っていました。事務職員の方には現在他にも思うことがあります。事務部内でももっと意見交換をし、業務の改善をしていければと思います。

２．昔と今の弘大生
－昔の弘大生を知る職員の見た目－

弘大には六十年近い歴史がありますが、今回は特に「大学の歴史の節目とも言える大学紛争」を知っている４名の職員を中心に、弘大生への思いを述べてもらいました。

職員の視点から

昭和40年代に吹き荒れた大学紛争は、本学でも例外ではなかったように、全学集会やデモ、ストライキや授業ボイコットにとどまらず、教室占拠。それに伴う機動隊の導入など、事務職員も対応に大変な苦労をしました。

今の大学では、このような活動は無くなり、きれいなキャンパスと充実した環境のもとで学園生活がおくれるようになりましたが、若い元気なエネルギーは何処かに隠れてしまったようです。

学生寮は、今の３つの寮も決して新しいとは言えませんが、昔の寮はすき間風、雨漏り、夏暑く冬寒いのは当たり前のようでしたが、学生たちには和やかな人と人との触れあいがあったように思えます、今はどうなのでしょうか。

今昔を語るとどうしても過去への思い入れもあってか、今に対して辛口になってしまいがちですが、お許し頂いて思いの幾つかをあげてみます。

・昔の学生は集団主義、今の学生は個人主義になっているのでは、
・出口を見据えて入学してくる学生が少なくなったのでは、
・学生と教職員との関係が希薄になっているのでは、
・他人との付き合いが下手になっているのでは、

など、これらのことは現代の若者全体に通じることかもしれませんが、時代の流れでしょうか、我々の世代にも責任の一端はあるのかもしれません。

３．転勤職員の見た目

国立大学法人には、大学の地元で採用された者のほか他の大学等を転勤している職員もおります。財務部には現在３名おりますが、３名がかつて所属したことのある大学は、北海道大学、東北大学、東京海洋大学、長岡技術科学大学、豊橋技術科学大学、奈良女子大学、山口大学、佐賀大学、長崎大学の９大学になります。

前述しましたが、直接学生との触れあう機会が少ないところですので、的確な見た目であるかどうかは別にしまして、各々が受けた印象等を感想としてまとめてみました。

弘大生の印象は、折り目正しく真面目であると感じています。

例えば、昼休みのキャンパスや、学生食堂での様子を見ていると、大勢の学生があふれ、各サークル紹介、軽音楽の演奏、学生同士の談笑している光景などは好感が持てます。

また、学生寮においても、新入生歓迎会等の行事の際には近隣の住宅に「ご迷惑おかけします」のような文書を配り、予定時間どおり行事を終えるなど、地域の一員としてのマナーの良さも感じられます。

課外活動においても、運動部の練習風景、学園だよりの表紙を飾る美術作品、フィルハーモニー楽団の演奏会、学園祭の活動、生協の活動など、丁寧で真摯な態度が見てとれます。

特に、きれいなキャンパスは誇れることでしょう。立て看板やビラが散乱することがありません。これは大学の姿勢もさることながら学生個々人の心掛けにもあると思われます。

しかしながら、きれいなキャンパスを曇らせているのは、自転車の駐輪ルールが守られていないことです、さらに公道での走り方や夜間の無灯走行など他の人の気持ちになってマナーを守りたいものです。

終わりに、大学では多種多様なプログラムを用意しております、休講措置を喜んで眠りを貪るなど、せっかくの機会を逃すことなく、多くの人に支えられた大学生という貴重な時間を有意義に活用するとともに、県外からの学生は青森に残るのもいいかもしれませんが、県内出身者は、夢を求めて「挑戦」という旅に出てから帰郷してみるのは如何でしょうか、すばらしい故郷がよりすばらしく見えるようになるかもしれません…。

「うるさいおばさん」の小言？

学務部学生課学生生活支援グループ係長
澤田祐子

奨学金や授業料免除の仕事を担当して３年目を迎えました。

たった３年の間にも、年々学生が幼くなると感じています。大学院生になっても奨学金や授業料免除について、ご両親のどちらかが問い合わせてくるケースが年々増えています。大学生にいたっては、家計上のちょっとしたことを本人に尋ねても、親御さんから電話で回答がある、ということも数多くあります。

けれども、一方で大変しっかりした、たとえば家計上の何を聞かれてもはきはき答え、「だから、できれば親に負担をかけたくないのです。」というような10代の新入生もまた増えている気がしています。

このところ、世間では所得の格差が広がっていると言われていますが、大学生の資質格差とでもいうものが広がっていると感じているのは私だけでしょうか。

幼いのが悪いというつもりはありません。ただ、すべて親任せでは今後困りますよ、ということは最低限親御さんにも、本人にも伝えるようにしています。本人には、「自分の学費や奨学金のことでしょ。」と小言の一つも言ってしまったりして、煙たがれることもあります。

逆に、あまりにも全部一人で、と肩に力が入っているような学生には、もう少し人に頼ってもいいのでは？と助言したくなります。けれども実際にはなかなか伝える機会はありません。せいぜい、「いつでも相談に来て。」と言うだけになります。

窓口での対応がずいぶん違うと言われそうですが、なるべく全ての学生に公平に接するよう努力しています。ただ、相性もあるのでしょうか、同じように受け取ってもらえないところが悲しいところです。

窓口で「うるさいおばさん」と聞こえるように言われたときは、さすがにショックでした。

けれども今は開き直って「うるさいおばさん」でいこうと思っています。

大学生のうちは、どうしても叱ってくれる人は少ないでしょう。それなら、嫌われてもいいから、その少ない叱る側の人間になろうと思ったからです。

「知らなかった。」という学生には「日頃から掲示を見る習慣をつけてね。」とか、「この書類でもいいと思った。」と簡単に答える学生には、「大学で指定した書類を必ず提出して。説明書に書いてあるでしょ。」など。

中には、「説明書は読んだんだけど」と言う学生もいて、「読んだらわかるでしょ。わからなかったら、記入する前に聞きに来て。」と小言が増えたりします。

さらに、提出書類に修正液や修正テープを使用したり、黒く塗りつぶしてある人には、「書類の訂正は二重線を引いて、訂正の印を必要なところに押してね。社会に出て修正テープが使える書類はほとんどないよ。」等々。

窓口でうるさく言われた人も多い事でしょう。

なお、授業料免除も奨学金も、「申請書類の提出日」については厳守とし、窓口では「締め切り日を守ってくださいね。」としつこく繰り返しています。

けれども、締め切り日を過ぎて持ってくる人は叱られたりしません。なぜなら、締め切り日を過ぎた書類は受け付けしないからです。

皆さん、掲示板をよく見て、締切を厳守してくださいね。

ホントは「やさしいおばさん」で、いたいと思ってるんですよ。

学務部学生課
就職支援グループ係長
長谷川 直 生

弘大の職員に採用されるまでは「地方の静かな国立大学」というイメージしかありませんでした。私は首都圏のマンモス私立大学を卒業しました。地方都市の国立中規模大学である弘大とは対極にある大学環境で過ごしましたが、初めて弘大キャンパスに足を踏み入れた時は、大学独特の雰囲気や香りには母校と共通のものがあった気がします。

現在はインターネットの普及により、情報のやりとりという面では首都圏の大学とまったく差がなくなりました。しかもきれいになった校舎の中にいると都会のキャンパスにでもいるような気になります。こうなってくると逆に地方にあることを売りにしたり、奇をてらったりして大学の特色を打ち出していきがちですが、私はいつの時代でも大学の根幹をなす教育、研究機能を強化していくことが大事であり、結局のところ大学が生き残る道ではないかと考えています。

次に弘大生についてですが、他大学も含めて15年以上会計系の事務に携わってきたため、直接学生と接する機会がまったくといっていいほどありませんでした。昨年から学生就職支援センターで学生と接してきて感じたことは、私の学生時代と同じ問題で苦労しているなということです。悩みの本質は変わっていませんでした。

学生達は就職について一生懸命考えていますし、何よりも一人ひとりが礼儀正しく素直でした。まだ基本的な社会のルールが身についていませんが、多くの学生は「このままで大丈夫」といえます。

就職のために自分自身を変えることはないし、20年以上生きてきて作り上げた自分のスタイルはそう簡単に変わるものではありません。人間には必ず長所と短所があるのですから、どんな小さなことでも自分で得意だと思うことは暇をみつけて磨きをかけていって欲しいと思います。

ただし豊かな時代に育ったせいか、辛い状況を耐え抜く力が欠けているという気がします。しかし、これとて経験が少ないだけで、社会人となって何度か厳しい環境にさらされると乗り越えられる資質が備わっているに違いありません。

気をつけてほしいのは、「これはとうてい出来ない」と自ら信じてかかるのはやめることです。そう思い込むことによって自ら出来ないようにしてしまうものです。今は失敗してもまだ「若いから」で済まされることもある貴重な時期なのです。

最後に学生時代でなければ出来ないことを見つけてもっと遊んで欲しいと思います。

「弘大職員２年生から見た目」

施設環境部整備計画課長
櫻田　正

施設環境部の仕事は何？、学生の皆さんには分からない方が多いと思います。施設環境部は、事務局（正門から入り右側の建物）の３階に事務室があります。業務概要は、学内施設設備の新築、改修、修繕、維持管理、環境マネジメント、安全衛生管理等を行っています。詳しくは、学内施設環境部ＨＰをご覧ください。また、学内の施設設備関係で何かお気付きな点がありましたら、是非、施設環境部にお知らせください。

私は弘前大学に異動し、この10月で１年が過ぎましたが、その間に感じた一部を紹介したいと思います。

「感心したこと」文京町団地の富田通りを学生さんらしい人が袋（スーパーの買物袋）を持って、ゴミを拾って歩く様子を何回か見かけたことがあります。誰かに言われたものでもないと思いますが、皆がこのような気持ちを持っていれば、ゴミのない大学、ゴミのない地域になると思います。

「感心しないこと」工事関係で、ある建物の講義室を現地調査した時、その部屋中に包装紙、瓶、カン等の屑類、新聞、雑誌等々、講義室全体がゴミ箱の中と思われる状態でした。学内施設を使用する方々へ、建物が古いからと乱雑な扱いを慎むことはもとより、汚さず、壊さず、散らかさず、の三原則をお願いします。

「普段の心掛け」ゴミは極力出さない工夫をすることも大切ですが、ゴミは分別しゴミ箱にという行動を「普段の心掛け」としてもらいたいと思います。ゴミを散らかしても誰かが片付けるだろうということでなく、自分で片付けることが一般的な社会のルールです。

「これ以外のこと」学内に駐輪する学生、教職員の自転車は登録することになっています。この決まりも守っていただけない方が多くいます。また駐輪は所定の場所、所定の枠内にお願いします。駐輪禁止の表示があるのに、そこに駐輪する人“文字が読めない？”、“表示の意味が分からない？”のでしょうか。これら駐輪や駐車を含め違反行為に対し、警備員が注意や指示をすることがあります。その時「なぜ警備員に注意されなければならないのか」という人もいるようですが、大学が警備会社に学内警備、駐車管理等の業務依頼しているものなので、警備員の指示に従っていただくようにお願いします。

最後に、雪が降り、駐輪場に置き去りにされたままで、冬を越す自転車が見受けられますが、冬期間は必ず自宅に持ち帰ってください。所有者の無責任な行動で、雪解け後、使用不能となった自転車は、粗大ゴミとなり、その後の撤去に膨大な費用がかかっています。

学生・教職員全員の良識ある目と、常識ある行動で、弘前大学を最良の大学に!!

「想像力」

学術情報部学術情報課
情報サービスグループ
藤井真嗣

図書館のカウンターで抱えている問題―返却期日を過ぎても返却されない「延滞本」の督促や、閲覧室内での飲食、図書館内での喫煙など―について、学生がなぜそのような行動に出るのか、カウンターの職員達でいろいろ想像しながら考えることがあります。その時にいつも感じるのは「学生がもう少し想像力を持ってくれたら..」ということです。

端的な例を挙げると、たまに見つかる図書館内での喫煙について考えるときによくそう感じます。現在附属図書館本館内には約20万冊の図書が収められております。その大部分が「紙」という可燃物から出来ていること考えると、もしかしたらボイラー室に次いで可燃物の多い建物かも知れません。また、図書館は年間延べ24万人が利用し、４万４千冊の本が貸し出されていきます。もし、図書館が焼失したら弘前市の人口以上の人々が迷惑します。もちろん、その中には就職も決まり、あとは論文を書いて卒業するだけ、という学生も含まれるでしょう。さらに、図書館に限らずキャンパス内でたばこが原因の事件が発生すれば、それを機にキャンパス内が全面禁煙という事にもなりかねません。これらのことを想像すると、図書館のベランダの影に隠れて一服、という気にはならないと思うのですが、如何なものでしょうか。

もう少し身近な、「延滞本」の問題についても同じように思います。使いたい資料が延滞中で借りられないということは利用者にとっても辛いことですし、その旨を告げる図書館職員にとっても辛いことです。また、本の返却が遅れて罰則が掛かり、レポートや試験勉強などで本当に必要な時期に本が借りられなくなった学生が「そこを何とか」と懇願して来るというのも、学生職員双方にとって辛いことです。「本の返却期日を超過する」とどうなるか、ということについて、学生一人一人がもう少し想像力を持ってくれたら、と思うことがしばしばあります。

附属図書館では毎年「言語力大賞」を主催しております。こちらに毎年応募される作品の数や入賞作品を読むと、弘大には豊かな想像力を持っている学生が数多くいるように思います。しかし、創作や研究の時ばかりでなく、日常生活においても、その才能を少しばかり働かせてもらえれば、より快適な大学生活を送れるのではないか、と思います。

ある裏方が見た弘大

人文学部総務グループ
鎌田貴己

「2,500字程度で、学園だよりの原稿をお願いしますっ」（編集委員のW先生）

「えーっ!？　2,500字ですかぁ。参りました（汗）。長文を書くのは久しぶりで。」

そんなやり取りがあった、人文学部総務グループでのある昼下がりのこと。テーマは、現在の弘大と学生を職員の視点から。かなり漠然としていますが、最近感じたことをそのまま書いてみます。

【現在の弘大】

私は、人文学部経済学科を平成10年３月に卒業しました。経済システムの鈴木教授のもとで修行しており、直後にここへ就職したのですが、最初の配属先は病院でした（平成10年４月）。実はこの時点で人文学部は改組されており、２学科制から３課程制へと大きな変貌を遂げていました。その大規模な改組に気づくこともなく、本町53番地で日々奮闘していました。

更にその後を見届けることなく、八戸高専へ４年間の武者修行の旅に出かけました。

高専生活４年、実に卒業から７年後（平成17年４月）、再び文京町に足を踏み入れた私の目に映った光景は…ご存知の方はお分かりでしょうが、中央の通りにあった自転車小屋が全く無いのです。しかも、見事なまでのレンガ敷き。開放感のおかげか、学生が気分よく歩いているようです。昔は授業を受けに来るたびに「自転車どこに置こうか、きついなー」と悩んでいたものです。

また、共通教育棟だった建物が総合教育棟へと改装され、学務部が一元化されました。今私が勤務している人文学部総務グループの部屋は、私が学生だった頃は人文学部の履修科目届を提出しに行くなどの場所として広く知られていました。昔の弘大を覚えていらっしゃる卒業生の方がたまに人文学部総務グループの部屋に来訪されますが、残念ながら卒業証明書は現在こちらでは発行できません…あしからず。

平成16年４月、国立大学が法人化されました。もちろん弘前大学も例外ではありません。学内の組織が刻一刻と変わる中、学生や教員にとっては更に健全で安全な教育・研究環境が必要です。激動の中、私は事務の裏方という立場ではありますが、状況を見極めた柔軟な発想と行動力で支えていきたいと常々考えています。時間があれば自分から足を運ぶ、情報を欠かさない、自分の仕事だけでなく、周囲にも絶えず気を配る。私の理想とするところです。

今座っている席では、来訪者に背中を向けていますので、いずれ首が攣るかもしれません。首がフクロウのように回ったと伝えられている司馬仲達が羨ましいこの頃です。

【現在の弘大生】

私は病院の医事課入院担当３年、高専で学生課を２年担当（あとの２年は会計課で、教員の福利厚生関係）しており、人と接する機会が多いことを天職と感じる一方、昔の自分と比較して、学生について感じることもあります。

表向きには元気に見えていて、虚ろな眼をしている学生が見受けられます。原因は定かではありません。私の学生時代の経験からすると、「自分に自信がないの

かな？」と思われます。毎日遠くから電車通学をしていた自分が言えることではありませんが…

今や大学全入時代が到来しました。目標を見つけて現在進行中の方は読みとばしてください。ここでは、誰かに敷かれたレールの上を自信なく「何となく」たどっている学生へ一言。

興味を持った分野の資格を取ったり勉強したりするなら今のうち。

学生時代、ある先生に「毎日日経新聞を読みなさい。」と言われていました。疑問に思いつつ結局読んでいませんでしたが（申し訳ありませぬ）、「しまった、惜しい時間を過ごしていた。俺は４年を無為にしたっ。」と悟ったのは、社会人になって暫くしてからのことでした。自分が得意な分野の興味をいち早く持つきっかけになっていたかもしれないのです。こうなっては後の祭りです。今私が更なる勉強に勤しみ、視野を360度にして周囲に気を配るのは、当時の反動なのかもしれません。

現在では紙媒体のみならず、ネットでも各種新聞記事を読むことができますから、暇ができたときでいいのです、読んでおきましょう。学生時代は無限とも言える時間があるのですから…「学生」はある意味最も優遇された身分です。利用しない価値はありません（嘘を嘘と見抜く能力も鍛えられることでしょう）。そういった記事や情報を頭に叩き込んだうえで、自分の考えを持っておき、重要なところで披露できるように脳内で整理しておきましょう。

自堕落に過ごすのは簡単です。簡単な道を選んで、約４年を無駄にしないようにしましょう。卒業生から陰ながらエールを送っておきます。

総合文化祭２日目の風景を屋上から撮った写真を掲載します（11/4　11時）。弘大も８年で随分変わりました。自転車小屋が懐かしい。

学生時代にやるからこそ意味のあることをしてください

教育学部総務グループ
細田修平

半年前まで弘大生だった私が、「今の弘大・弘大生」について何かを書くというのは難しいもので、なかなかとっかかりが見つけられないまま締め切りのぎりぎりになって書き始めています。

私が学生だった頃とあまり変わっていないことを前提に、少しお話しさせていただきます。

私の学生時代は、常に「明日がある」という幻想に取り憑かれながら過ごした4年間でした。レポートや授業に係わる勉強を「明日やればいい」という、怠惰な感情ではなかった、と一応弁解はさせてもらいます。

例えば音楽。大学生でバンド活動に夢中になっている知り合いがいます。「学生のうちに芽が出なければ・・・」という話を良く聞かされるものですが、たとえ芽が出なかったとしても、とても有意義な学生生活だと私は思います。そして羨ましいと思います。

若いうちにやってこそ意味のあること、あるいは、その後の人生を決めてしまうかもしれない芸術的な趣味や物作りに熱中できること、そういうものが自分の学生生活にもあれば良かったと、今になってよく考えさせられます。

私の場合、そのような学生時代を謳歌する活動をする時間として、まだまだ「明日がある」と思い込んでいたわけです。（くどいようですが、レポート等はきちんとやっていたつもりです。）

ほとんどの学生さんは、十二分に学生生活を謳歌しているように思います。平日はサークル活動やアルバイト、休日は旅行、と見聞を広げながら充実した生活を送っていることでしょう。先日の学祭でも活気のある姿を見ることができました。

ただ、もしこの記事を読んでくれた人で「自分の生活が充実していない」と感じる人がいたとしたら、是非これを機会に一歩踏み出して学生生活を楽しんでください。

学生でいられる時間の価値、それを少しでも考えてもらえたら幸いです。

変化のかたち

教育学部附属教育実践総合センター
吉崎聡子

平成16年度に国立大学法人となり、早３年目を迎えました。法人化前後を弘大で過ごした身として、変化の早さに驚くばかりです。

地域に開かれた弘大を標榜する中で、以前こんな光景を目にしました。夏の夕暮れ時、文京町キャンパス内を散歩されている市民の方。冬の雪で大変な時期、車道よりも丁寧に除雪されている文京町キャンパス内歩道を利用される市民の方。特に冬は車道が雪のため歩行困難となり、キャンパス内歩道を利用されている方を多く見かけました。弘大が地域に開かれている一つの形だと感じました。

また去る11月３～５日、好天の中総合文化祭が開催されました。多数の市民の方が来場され、弘大生の熱意と相まって活気溢れる総合文化祭となっておりました。市民の来場者増は、地域に開かれた大学による地域のイベントの一つとして定着しつつあることを示していると思われます。しかしながら散歩される方や文化祭へ来場される方がいらっしゃる反面、「学内には一般の者は入れない」と思っていらっしゃる方が多いことも身をもって感じております。地域に開かれた弘大のためには「学内には一般の方も気軽に入れる」という根底的な認識の変化に向けての広報活動が益々重要であると思われます。

弘大生に目を転じると、学生支援サービスの充実に目を見張るばかりです。履修、学生生活、就職活動と弘大で過ごす時間を充実したものにするための支援が多く設けられております。中には私の学生時代にもこの支援がなされていれば・・・と思わされるものもあります。そんなたくさんの支援サービスを上手く活用し充実した大学生活を送って下さい。

学内外に渡る変化と共に、弘大が長年培ってきた穏やかで純朴な気風＝『弘大らしさ』も大切にした今後の発展を願います。

ちょっと足りない

医学部医学科総務グループ
成田知子

弘前大学が法人化されて２年、なんとも目まぐるしい日々でした。そんな中で一事務職員として考えるのは、法人化前は何をするにも国が決めた法律・手順に従ってやってきたけれど、これからは法律以外の手順は私達弘前大学自身で作っていかなければならないということです。ついこの間までは事務の雛形があって、それに従っていけば、例えどんなに無駄な労力が費やされていたとしても、それが正解であり間違いのないことでした。

法人化されて他大学から届いた文書に目を通していると、ついこの間までは全く同じ手順・様式に従っていたのに、今はかなり違う手順・様式を使っていることに驚かされることがあります。ここの大学はいろいろ工夫しているなと感心します。

弘前大学の事務は，ちょっとその工夫が足りないように思います。法人化に伴い、効率化をますます求められているのに、基本的に国立大学時代の雛形をひきずっているため、業務が対応しきれない矛盾をあちこちで見かけます。

「大学さ初めて来たじゃ。こったに中広いんだなぁ。」

総合文化祭で駐車場の整理をしていると、来場した中年男性が帰り際に笑顔で仰いました。今までは来ようとも思わなかった大学にわざわざいらっしゃるなんて，法人化後に開かれた地域の大学として広報に力を入れた成果と感じます。事務もこれに負けない成果を結ぶように、効率化を考えて業務の工夫をしていこう思います。

医学部解剖学第二講座　技術職員
藤岡直哉

私は平成11年４月に民間病院の臨床検査技師から医学部解剖学第二講座の技術職員（当時は文部技官）として採用され、主に献体関連の仕事をしています。弘前大学は独立法人化して３年目になりますが、ただ単に国立弘前大学から国立大学法人弘前大学という名前になっただけというのが私の率直な感想です。まだまだ官僚的とでもいいましょうか、私には理解できない事が多々あり、末端の職員があれこれ言っても始まらないとは思いますが、民間から公務員、いつの間にか団体職員となった私が、民間の視点で今の弘前大学について感じていることを書いてみます。

まず、教職員に対する絶対的な情報量が少ないという事です。私は情報を取捨選択し価値を決めるのは、情報の受け手であると考えます。ですからどんな小さな情報でも、たとえ関係のない部署・講座だったとしても全教職員に伝えるべきだと思います。例えば「教授会でＡをＢに変える事にした。」現状では情報はこれだけです。Ａを変える理由、Ｂに決めた理由があるはずなのに情報が来ないのです。ＡをＢに変えた教授会の決定＝弘前大学の意思が情報として全教職員に伝わっていません。しかし、情報量が増えてくれば弘前大学の意思を全教職員が感じられるはずです。多くの部署から出る情報を基にひとつひとつ積み重ねていき全教職員がベースとなる共通意識を持つ事。それが出来るようになれば、まず一歩前進というところではないでしょうか。

次にコスト意識が低いという事です。例えば使用物品の在庫管理、使用履歴はいらないのでしょうか？自宅ではトイレを出るとき電気消しますよね？また、残業することは賃金以外のコストもかかります。事務関係ではパソコンはそれぞれが様々な種類を使用しているようですが、各講座の受付も含めて何故リースにしないのでしょうか？コスト削減のために民間では当たり前に実施されている色々なことが、何故弘前大学ではできないのか疑問に思います。安易に給料カットや人員削減をする前に考えていただきたい事です。

保健学科ＦＤフォーラムについて

医学部保健学科グループ学務担当
國包勝榮

保健学科では設立当初に編成されたカリキュラムの見直を進めるにあたり、学生の意見を反映させることを目的に、平成14年度末に教育カリキュラムに関する学生アンケート調査及びＦＤフォーラム開催を企画・実施しました。第１回ＦＤフォーラムが平成15年２月13日に開催されてから平成17年12月７日の第４回ＦＤフォーラム開催まで、毎年１回開催され、「保健学科の教育をより良いものとするために」の共通認識の基、教員と学生が意見交換を行ってきました。ＦＤフォーラム開催に向けＦＤ委員会が設置され学務が担当となったことから会議等の出席を通して学生の意見を聞く機会も増えてきましたが、日頃、私なりに感じていることを述べてみたいと思います。（ＦＤ委員会は教員委員と学生委員から構成されています。）

ＦＤフォーラムの開催時期については、学生が臨地・臨床実習に出かけている関係で第２回からは12月上旬及び１月上旬に開催されてきましたが、10月から開催に向けての取り組みが始まります。取り纏めるのはＦＤ委員会ですが、ＦＤフォーラムで取り上げるテーマの設定及び授業改善等に向けての要望事項等については、学生委員からの提案を基に議論します。学生委員は学生の要望等をくみ上げるために、各クラスごとにアンケートを実施したり、個々の学生に意見を求めたりと努力しており、その結果報告をＦＤ委員会で聞いているとＦＤフォーラムを成功させようとの熱意が感じられます。また、ＦＤ委員会では教員委員から要望事項の中身について整理することが必要との指摘及びＦＤフォーラム本来の主旨に沿った意見交換の場としたいとの提案があることがあり、学生委員としてやむを得ないのかもしれませんが、会議に臨むにあたり意見の集約・整理ができていないと感じることがあります。

ＦＤフォーラム当日は、予め決められたテーマを中心に学生・教員とで活発な意見交換が行われますが、学生の参加が少ないのが残念です。

保健学科の学生は卒業後、大多数の人が医療従事者として人と接する仕事に就くことを考えると、ＦＤフォーラム等が開催される折りには、積極的に参加し人の意見に耳を傾け、自分の意見を述べることが大事なような気がします。

大学では今、ＩＴ化の名の下にコンピューターが授業に取り入れられてきていますが、「大学の授業を考える会」で行った〈学生が求める授業〉の調査結果では次の３点が上げられています。「出席しなければ味わえない授業」「教師の人間性と専門性がミックスしている授業」「教師の熱意が感じられる授業」。また〈学生が望む大学〉は「教師との対話が頻繁にできる大学」「自分（人生）について考えさせられる授業の多い大学」「多くの人との出会いが可能な大学」となっています。［“生き残る大学”の条件（原孝著）から］この結果をみると学生は教員との対面授業、人間的なふれあいを求めていることが解ります。受験勉強に時間を費やしてきた学生にとって入学した大学で心を割って話し合える友達が欲しい、授業での質問に真面目に答えてくれる教員を望んでいるのではないでしょうか。大学生だからといって距離をおくのではなく、保健学科の学生として育てていこうという気持ちが大事なような気がします。学生の教育は論文の発表と違い目には見えない部分がありますが、学生が卒業するとき、保健学科で学べて良かったと思えるような教育ができたらすばらしいことではないでしょうか。学生の気持ちを汲み学生と一緒に考え行動する教員がこれからの保健学科を支えていく力となるような気がします。

「現在の弘大・弘大生について ―職員の視点から―」

理工学部総務グループ
鈴木　亮

私は今年度より大学の職員として理工学部に配属されたのですが、それ以前は、弘前大学と同様の関西にある地方国立大学の大学院に在籍していました。

そんな私が弘大生と接して感じたことは、私が在籍していた大学の学生と同様、都市部の学生にはない素直さと素朴さを感じました。ただ、気候的なもの、あるいは土地柄がそうしているのかもしれませんが、関西の学生に比べ「はっちゃけた」学生が少なく（「いない」とは言いません）、朴訥な学生が多く見受けられました。「朴訥」というと語弊があるかもしれませんが、逆に言えば、真面目で研究熱心な学生さんが多数いると思いました。

ただ、生活態度を見渡すと、喫煙マナー、駐輪マナーの悪さ、あるいは食べ終わった弁当の空箱を講義室に放置するなど、基本的なマナーが欠如している点が見られ、大変残念に感じられました。

また、このような学生を擁する弘前大学は、独自の文化と歴史を持つ弘前市にあり、研究環境に大変恵まれた場所に立地しているなと思いました。

近年弘大生の就職率が逓増していることをみると、前述のような弘大生の「真面目」さが就職先に受けているのかな、と感じました。

私の抱く大学のイメージ

理工学部教育研究支援室
佐久間 一 行

「授業・研究をしている教員」「サークル活動に夢中な大学生」、これは私が就職する前に抱いていた、「大学」に対してのイメージです。いかに大学を知らなかったか、ということがばれてしまいそうです。

学生への教授のほかに、先端的な内容の研究活動と地元の物を有効に利用した研究、地域との協定などの地域へ参加することによって、弘前市や青森県とともに盛り上がっていこう、という意識が個々の教員から感じます。これは「世界に発信し、地域とともに創造する」という、弘前大学のキャッチフレーズが浸透しているからではないでしょうか。

講義室の前を通りかかると、机に突っ伏している学生を見かけることがありますが、実験や実習の際にはありません。積極的に臨む学生ばかりであることがすばらしい。ですが、大学生の実験は知識に裏づけられたものでなければならないから、ぜひ、座学のほうにも・・・。

「特産物を生かした研究や、先端を行く研究をしている教員」「興味を持ったテーマに積極的に取り組んで知識を吸収しようとする学生」、これが今の私が抱く「大学」へのイメージです。今後、どのように弘前大学が地域に貢献し発展して行くのか興味があります。私もそれに貢献するために何が出来るのか考えながら、日々の仕事に取り組んでいきたい。

匿 名 希 望

事務系職員の視点から、日頃抱いている現在の弘前大学や弘前大学生に対する意見や感想をということですので述べさせて頂きます。

弘前大学が国立大学法人弘前大学と変化した現在、以前の国立学校特別会計の時代と違ってキャンパス構内が非常に綺麗になった感じがしております。これから予想される大学生の少子化に伴う減少に対処するための、魅力ある地方大学づくりに力を入れた結果のひとつであるとうれしく思っております。

また、弘前大学生に対しては、勉強することは当然のこととして、最近の全国就職事情の好転きざしに恵まれつつある時期の利と、この弘前市近辺の「弘前ねぷた」「青森ねぶた」「五所川原立ちねぶた」「世界遺産白神」「国立公園十和田湖」等の祭りとか観光地の地の利を、欲張りですが全部利用して社会に巣立っていって欲しいと願っております。

就職率の向上＝大学としての商品開発能力

農学生命科学部総務グループ
福 眞 吉 教

最近、学生に声を掛けられることが多くなった。「おはようございます」。決して悪い気分はしない。朝から清々しい気分にさせてくれる。また、廊下を歩いている時に会釈してくれる学生も増えた。これも気分がいい。別に学生よりエライと思ったことは無い。しかし、私自身学生だったときに職員に対して会釈なんてしなかった記憶からすれば、非常に嬉しい。

私が学生だった頃、「バブル」と呼ばれた時代。学生の本分である「勉学」は二の次で毎日遊び惚けていた。そんな学生であっても、公務員という仕事に就くことができた。そして、売り手市場の名の下に仲間たちは、有名企業に就職していった。（その後については知らないが・・・。）

ここ数年、本学の就職率が伸長している。これは、本学における就職対策に寄るものでもあるが、実は、学生一人一人の努力の賜物である。「就職率を上げることが大学の未来を明るくする」と考えて就職活動する学生は一人もいないであろうが、結果としてその積み重ねが就職率として反映されるのである。

ところで、本学学生の出身都道府県を見ると断然青森県出身者が多い。このことは大学幹部の言う「地方の中規模総合大学」としては仕方のないことである。多分、本学と同規模の「地方の中規模総合大学」でも同じような状況にあることは想像に難くない。

果たして本学は、「地方の中規模総合大学」＝「オラがムラの大学」として地域に根ざした大学運営を行っているのだろうか？その運営の結果として就職率の向上に繋がっているのであろうか？

恐らく答えは否である。前述のように学生一人一人の努力の結果としてである。セミナーを開催しても出席するのは学生自身であるし、就職活動のアドバイスを活かすも殺すも学生自身である。逆にセミナーを開催しなくても学生は自ら就職活動を行うはずだし、ＯＧ・ＯＢ訪問等で有意義なアドバイスを貰う学生もいるであろう。つまり、大学は「今年は何人就職した」という結果だけを享受しているのである。ある意味では、学生の努力があってこそ、大学が評価されると言えるのである。

「学生は商品である。４年掛けて磨き上げ、良い商品として社会に還元する。」学生時代の某教授の言葉である。良い商品とするため（なってもらうため？）に我々職員は学生に負けないほどの努力をすべきである。さらにそのことが大学評価へ直結していることを認識すべきである。

Ⅲ　総合文化祭報告

第57回弘大祭を終えて

学祭本部実行委員会委員長　佐々木　　佑

Opening　Festivalで挨拶する弘前市長と
ミスりんごあおもり

4月から着々と準備を重ねてきた第57回弘大祭でしたが、11月5日をもって無事に終了することができました。期間中は3日間とも晴天に恵まれ、昨年をはるかに上回る数のお客様が来てくださいました。非常に嬉しく思っております。このような良い弘大祭になったのは大学職員の方々、一緒に学祭を盛り上げてくれた学生の皆さんのおかげだと思っています。本当にありがとうございました。

今年は連休を利用した3日間の日程で「ＦＵＮ」をテーマに「楽しい学祭」、「また来たくなる学祭」を目指しました。その期間の中で私たちは沢山の笑顔を見ることができました。来場した方々の笑顔、模擬店をやっている学生の笑顔、イベントの参加者の笑顔など様々な笑顔がありましたが、それら全ては私たちにとって何よりも嬉しいものであり、これまで準備を頑張ってきて良かったと思えた瞬間でした。また、様々な人の笑顔が見られたことで「ＦＵＮ」というテーマを達成できたようにも感じています。

学長主役イベントでジャンケンをする遠藤学長

33畳の大旗を操る「津軽もつけんど蒼天飛龍」

弘大生「HIRODAI　焔舞陣」と
青森公立大生「影飛威Sea」のメンバー

6年前から総合文化祭という名称になった弘前大学の学祭ですが、年を重ねるごとに参加する学生の数も来場してくださるお客様の数も増加しています。プラスの方向に進み続けていますが、まだまだ満足はできません。学祭が迫ってくると「学祭の期間は実家に帰る」という耳の痛い会話を聞くことがよくあります。私が入学した年に比べるとそのような声は少なくなっているようには思いますが、せっかく自分の大学の祭があるのに実家に帰ってしまうのは勿体無いような気がします。学生の皆さんが学祭に参加することで規模は拡大し、それに伴ってお客様も増え、学祭は盛り上がっていくのではないでしょうか。

弘前大学の学祭は楽しいものです。今年、参加した皆さんはぜひ来年も参加し、一緒に学祭を楽しみましょう!!そして、今年、参加できなかった皆さん!!来年はぜひ参加して一緒に盛り上げましょう。

カラオケ大会で講評する須藤理事

熱演するジャズ研究会のメンバー

医学展で一般市民に説明する医学部生

力作揃いの弘大職員芸術・造作作品展

Ⅳ　海外だより

第3回日中共同シンポジウム参加、農村訪問記録

農学生命科学部　宇　野　忠　義

1）テーマ：「中国北方地域における経済開発と環境保全」
　　Economic Development and Environmental Conservation in Northern China
2）開催地：中国内蒙古自治区フフホト市・昭君大酒店。内蒙古財経学院会議室
3）主　催：（中国側）内蒙古財経学院，内蒙古大学，内蒙古師範大学，内蒙古農業大学
　　（日本側）茨城大学，拓殖大学
4）期　日：８月25日～27日（27日は草原地帯エクスカーション）
5）参加者：中国７大学・３科学院、日本６大学、合計95名

私はシンポジウムに参加し、報告・議論に参加したが、ここでは、８月28日（月）、フフホト市郊外の農村訪問調査について記録にとどめたい。

（茨城大学参加者：中村耕二郎、田附明夫、金澤卓弥、長澤淳、学生３名（吉田、六島、高柳）、留学生２名（畢奎志、莎日娜）。畢奎志君の上司、同僚、運転手等中国人５名。弘大：宇野忠義）

訪問地、フフホト市南方にある黄土高原地帯、標高1300㍍～1400㍍程度。市中心部から自動車で２時間40分。１時間余り広い舗装路を走った後、黄土の高原道路を揺られながら進む。途中道路事情がきわめて悪く、黄土の粘土質土壌がでこぼこに固められていて、左右前後の凹凸が激しい。自動車の交差も難しいほど狭い箇所もあり、集落近い最後の登り道は狭くて急で、徒歩で上るほどであった。集落に行く途中、ぬかるんだ後の道路で乗用車がハンドルを取られ、左側の草原に脱輪した。男性７，８人で自動車を道路上に運び上げ、やっと運転再開となった。

集落は、日本で言えば平家の落人の集落のように、人里離れた高原の奥地にあり、電気は通じているが、電気器具はほとんどなく、飲料水も後述のように、麓の泉まで歩いて上り下りして、肩に担いで運ばなければならない地域である。自動車も見あたらない。あってもオートバイのみであろう。農牧業を中心とした自給自足の生活である。若者は雇用兼業に従事しているものもいるようであり、その意味では兼業農家もみられる。

小学校は隣の集落にあるので子供の足でも通学できるが、中学校は歩いて２時間の距離を毎日通学してきた（30歳近い女性からの聞き取り）。現在は、中学校には寄宿舎があり、月曜日から金曜日までは寄宿舎に住み、週末に２時間歩いて自宅に戻っているとのことである。

毎日１㎞を上下して水を運ぶ80歳の農夫

農具も鉄製の農具は乏しく、多くの木製農具や、木製の住宅用具、畜舎用具であった。その他、瀬戸物、素焼きの土器が用いられている。調理は竈で大きな鍋を利用している。

その集落訪問のきっかけは、茨城大学留学生畢奎志君の会社の同僚がその村の出身であり、彼の案内で、実家を訪問し、昼食をみんなでいただき、農村生活を体験した。

その集落はかっては30数戸あったが、今では10戸のみとなり、高齢者が多く、あるいは高齢者を抱える家庭が残っている。若者は流出していった。いわば過疎集落である。

住居は洞窟（中国語でヤントウと呼ばれる）を利用した簡単なものである。黄土の断面をトンネル型に５㍍ほど奥深く掘り、その穴が４つ並んでいる。１世代が２つ利用するようである。それぞれの洞穴の真ん中当たりで両サイドの穴と連結しており、各穴の出入り口と洞窟内の部屋の横穴と２つの通路がある。ただし、中央部の２つの部屋は、表側は窓のみで出入り口はない。居間兼台所とか、寝室は、土間の部分と高床の部分とがあり、居間、寝室は窓側＝表側で高床である。通常の扉の着いた出入り口は向かって右端の部屋と左端の部屋の２つのみである。扉の着いた両端の部屋は、穀物、野菜置き場と調理場や、物置をかねている。室内は温度変化が小さく住み易い。

当家は100ムーの畑地があり、ロバ１頭、豚、鶏十数羽、ひよこ十数羽を飼っている。家畜小屋は家の前に土で出来た簡単な小屋にロバ、豚、鶏が分かれて、飼養されている。

経営主は30年前に四川省蓬渓から移住してきたという。四川省は土地が少なく、人口が多く、生活が苦しかったので、物乞いでこの地方に来たとき、親切にしてくれたので、移住してきたとのことである。経営主は56歳？であり、26歳？の時に移住してきたことになる。

家族は現在経営主夫婦、息子夫婦、孫

洞窟住居の一部。右端が出入り口。

男子11ヶ月１人である。息子はフフホト市で工場勤務している。

飲用水は麓の泉を利用した共同の井戸から毎日つるべで汲み上げている。家畜用には、雨水をためおく井戸が一つ庭に掘られている。

当家は、飲用水は、ドラム缶を利用したタンクに漏斗のような受け口をつけ、それをリアカーのような荷車に載せてあり、ロバで引いて運搬するという。いずれにしても水がもっとも貴重な、まさに命水となっている。

2005年には、政府の補助事業で雨水を貯留する家畜用の水くみ場（井戸）を建設した。これは全戸に一つ作られたが、一個の建設費が1000元であり、300元を自己負担した。

右隣の農家は、72歳の老人とその息子夫婦、孫２人の５人世帯である。なお、老人の子供は男一人、女二人であった。一人は比較的近くに住み、もう一人はフフホトに住んでいる。息子は働きにでている。畑は67ムーであり、ジャガイモ、トウモロコシ、秕谷子、野菜を作っている。ロバは１頭である。ロバはどこも１頭いるそうである。2001年から2003年は干ばつであり、収穫が少なく窮乏したが、政府が米や食料、衣服を支給してくれ何とか生きながらえている。

改革開放後、生活はよくなったという。

72歳の老人が日本人をみたのは15歳の時（戦時中？）以来であるといい、私達の訪問を珍しげにして様子をうかがい、写真撮影に応じてくれた。質問にも快く応じてくれた。

この地に生まれ、72年間住み着いてきたと言うことであり、まさに黄土の「大地の子」といった印象を強く受けた。小柄でやせ細ったスリムな老人であった。顔色は黄褐色であり、身なりもきれいな野良着姿である。

テレビもラジオも電話もなく、新聞もなく、ただ電灯のみであるという。生活は、息子の働きと子供の仕送りに頼っている。農作業は余りしていないようである。

もう一戸の隣家（左隣）は、36歳の経営主である。両親がいて手伝ってくれる。子供は２人の６人家族である。畑は30ムー、トウモロコシ、高菜、ジャガイモ、野菜、豆類、羊30頭、ロバ１頭、親豚１頭、鶏10羽を飼っている。

親の代に、こちらの方に土地があり、住みやすいと言うことで四川省から移住してきた。兄が２人おり、一人は近くに住み、もう一人はパオトウ市に住んでいる。

移住歴が新しいためか、耕地面積は少ない。なお、この地域の配当面積は、一人当たり10ムーなので、移住当時３人のみであったのであろうか。現在は６人家族なので、経営、家計は厳しいようである。

（注：１ムー＝15分の１ヘクタール）

世界最大の帝国であった元の本拠地でもあり、内蒙古には49の民族が住んでいるといわれ、多宗教でもあり、各種の寺院が見られる。他民族国家中国の縮図でもある。

ところで、午前中に見学した蒙牛乳業集団公司と比較して洞窟集落のあまりの格差に驚かされる。両者の間には何世紀にも渡る隔絶的な格差がみられた。

蒙牛乳業集団公司は、乳牛6000頭の搾乳規模の巨大乳業経営であり、飼料作、搾乳などの飼養管理、牛乳や乳製品の製造を行う、アジアーの規模の巨大企業である。元々は国営の乳業公司であったが、中央・自治区政府の支援・指導の下に、国有地の払い下げを受け、外国の資本、技術も導入し、現在は民営化されている。経営者は、地元の中国人資産家である。巨大乳業プラントには20カ国の業者の参加があり、多くの最新鋭の技術、施設が導入されている。搾乳施設などはスェーデン製であり、一度に60頭の牛が回転式のミルキング・パーラーによって10分余りのうちに自動的に搾乳を開始、終了することが出来る。施設の管理運営にスェーデン、オランダ、オーストラリア等の技術者を招いている。

近くにある外国人宿舎は実に豪華なものであり、広くゆったりとした１戸建てのたたずまいは、中国人の集合住宅と比べ、ましてや洞窟住居と比べてまさに雲泥の差がある。

留学生等親日的な人も多く、内蒙古に強い親近感を抱いた。しばらくは、内蒙古の虜になりそうである。

最後に、国際学術振興資金を利用して渡航させていただき、記してお礼を述べたい。

訪問した農家家族と訪問団一同。

V. 海外留学報告

留学が楽しい！

人文学部人間文化課程　尾　坂　裕　美

フランクフルトの旧市街地。外国人にとって、「俺ドイツに来たぞ！」と一番感じる街並み。でもすぐ近くには実は大きなビルが立ち並ぶ。

2005年の８月から今年の８月まで、私はドイツのトリアーという街で留学を経験しました。帰国後、再会したほとんどの人に「ドイツ語はペラペラになった？」と聞かれますが、正直言って、胸を張って「ドイツ語が話せます！」と言えるほどの出来ではありません。それどころか現在は、ただでさえ未熟なドイツ語力を衰えさせないよう必死になって勉強しなければならない状況で、ドイツ語の先生たちとお会いするのが恥ずかしいくらいです。

ですが、そんな私が自信をもって言えることは、「留学して本当に良かった」ということです。10月から2月半ばにかけての冬学期の頃は、ドイツでの生活にうまく馴染めず、人間関係に悩むことも多く、正直「こんな国大嫌いだ！」と思ったことすらありました。しかし春休みが終わり、夏学期が始まって一ヶ月くらい経つと、たくさんの人とドイツ語だけで会話し、泣いたり笑ったり悩んだりしている自分がいました。そしてやっと留学を楽しいと感じることができるようになったのです。どうやら、パーティーに積極的に出るようにしたのが功を奏したようで、それからは割りと充実した毎日が待っていました。

そしてそのうち、「友達」と本当の意味で呼べる人もできました。ドイツ人や留学生の人たちとは不完全な言語のみで会話してきたわけで、それでも私と友達でいてくれる人は、つたないドイツ語の中の私らしさをすくいとって、感じて、好きになってくれたのだ、と思うと嬉しくてたまりません。短い文章の中に埋もれている小さな私を認めてくれたのです。不完全な状態を互いに補い合う関係は、とても素敵なものでした。私が特に仲良くなった女の子は、フランス人だったのですが、彼女とはよく一緒に映画を観に行ったり、ショッピングに行ったり、恋愛相談をしたり、週末にはパーティーに一緒に出かけたりと、ここに書き尽くせない位たくさんの思い出を共有しました。フランス人の彼女の言葉のアクセントは強烈で、単語量の少ない私には彼女のドイツ語が完璧には理解出来ないことも少なくなかったのですが、なぜか気が合い、互いに分かり合えました。彼女とは今でも毎日のようにチャットで会話をしています。

左からイギリス人、フランス人、ハンガリー人、私、ベルギー人。
イギリスがポルトガルに負け、フランスがブラジルに勝った日の試合後のパーティーは、決勝より盛り上がった。
イギリス人は自棄酒、フランス人は終始ハイテンション。ワールドカップの年にドイツにいられて本当に良かった！！

ベートーベンで有名なボンにて、ライン川をバックに。ギリシャ、トルコ、スペイン、フランス、アメリカ、そして日本の代表が集合！

しかし、夢はいつも良いところで覚めてしまうのですね。慣れてきて、当たり前のように一緒にいるメンバーが出来始めた頃に留学は終わってしまいます。最後の方にやっと知り合った人もいるのに。でも、「ああ！帰りたくない！！」と思えるときに帰国するということは、その留学が良いものだったという証拠なのだと思います。殻に閉じこもってしまい、自分を見失ってしまっていた前半戦と、帰ることなんて考えたくなくて、一日一日を大事に過ごした濃い後半戦。他の国から来ている留学生に比べて遅咲きの留学でしたが、暗い気持ちのときが無かったら、アクティブになろうという強い努力をせず、前のままだったかもしれないし、結果的に全て良かったのだと思います。

日本対オーストラリア戦を観にカイザスラウテルンへ。列車の中ではなんと日本語のアナウンスが。
チケットが取れず、スタジアム横の広場で観戦。試合開始前なので笑顔！

憧れの木組みの建物。たくさん並ぶと恐ろしくかわいい。

私が留学で得たものは・・・語学力（中途半端）、友達、度胸、セリーヌ（前述したフランス人の友人）と一緒に買った服、たくさんの写真・・・etc.　挙げればきりがありませんが、とにかく自分の経験値をちょっとアップさせることができたようです。このような素晴らしい留学の機会を与えてくれたみなさんに感謝します。本当にありがとうございました。そして、留学してみたいと思っているそこの皆さん。言葉は努力次第で後からついてきます。お金とご両親が許すならば、ぜひ海外に飛んでみましょう！きっとなにか良いことありますよ。

生の異文化、そして日本を見つめる大チャンス。

人文学部人間文化課程　新　川　可那子

日本語学科主催の七夕パーティーで。カラオケを持ち込んでみんなで大盛り上がり！

2005年の春からドイツのトリアに留学し、そこで体験したことは予想以上に今の私の財産です。そこで経験したのは、旅行では知りえないヨーロッパの生の文化、考え方でした。スーパーマーケットには必ずあるチーズ、ソーセージ切り売りコーナー。市場で積まれた目を疑うほど大量のにんじん、オレンジ。見たこともないような大きなきゅうりやネギ。お正月に経験した震えるほど寒い教会でのミサ。車いすも乳母車も自転車も乗せられる大きな公共バス。真冬の女の子たちの臍だしルック。首が折れそうになる激しい移動式絶叫マシーンなどなど……。日本ではできなかった新鮮で不思議でステキな体験をいっぱいしました。

それから私はドイツで日本というものをはじめて客観的に知ることができたと思います。ある言葉に「たった一つの言語しか知らないものは言語を知らないものである」というのがありますが、それを国にあてはめてみると、ああそうだなぁと実感します。ドイツという日本と違っ

年越しは気の合う仲間たちと変装パーティーで迎えた。花火の音にみんなでワイン片手に外へ飛び出しているところ。

誕生日パーティーでの一幕。黒い服を着ているひとで集まって千手観音ごっこ。

た文化のなかに浸ってみて、私は日本がどういう国なのか、冷静に考えることができるようになったと思います。いいところも悪いところも含めて。

実際に留学してみて、ドイツ語（というか日本語以外の言葉を使いこなすこと）はかなり難しく、コミュニケーションの面ではとても苦労したのも事実です。「えいっ！」と勢いで留学を決めてしまったため、言葉の面ではかなり未熟だったのでした。それはそれで良かったと思いますが、自分の言いたいことがうまく伝わらない、相手の言っていることが分からないことはしょっちゅうで何度ももどかしい思いをしました。これも貴重な経験だったと思います。どうやったら伝わるかをいつも考えていました。むしろ日本でいう「空気を読む」とか「相手の気持ちを察する」というものが通じないので、かなり積極的に発言するようになったかもしれません。

それでも私を分かってくれようとした友人たちにはかなり感謝しています。さらにトリア大学では日本語学科というものがあり、日本の留学生たちとの交流に積極的だったのが幸いでした。Stammtischという定期交流会があり、なぜか場所はいつも居酒屋でしたがそこでいろんな情報を交換したり、タンデム（Conversation Partner）を見つけたり、面白いお酒を試したりして楽しんでいました。

語学コースを受けていたため、他国の友人もできたのも嬉しい特典です。大学の語学コースでは交流会ということで居酒屋ツアーがあるんですね、なんだかお酒の捉え方が日本と違うようでびっくりでした。さらに学内に教会やダンスフロアもあるのです。学食もパーティーによってはダンスフロアになるのも驚きでした。仲間たちと夜がふけるまで笑いながら楽しく過ごしたのは今でも大切な思い出です。

留学は視野が広がるステキな経験だとおもいます。悔しい経験も辛い経験も、何一つ無駄にはならないし、実際わたしはまたドイツに行きたいと思っています。

地元のクリスマスマーケット。お店一つ一つが凝った飾り付けをしていて可愛い。

イタリア人の友達と。夏休みに彼女の家に泊まりに行って、イタリア観光も。

ニュージーランド留学体験記

人文学部情報マネジメント課程　川　嶋　真　季

写真1

去年の2月から12月までの約10ヶ月間、ニュージーランドのオークランド工科大学で交換留学をしていました。この留学経験から得たものは、英語のスキルだけではありません。私にとって一番の収穫といえるのは、次の2つです。

一つ目は、大切な友人、仲間たちです。私は大学寮に住んでいたのですが、そこには現地の生徒だけでなく、実に様々な国の人たちが暮らしていました。とにかく下手な英語でも、積極的に自分から話しかけたのですぐに友達もできました。一番初めにできた友人は、部屋が隣のLucieというフランス人とSangeetaというイギリス人の女性です。彼女たちは初めのころ、ニュージーランド英語が聞き取れないことが多かった私を、いつも助けてくれました。写真１に写っているのは、私にとっては兄弟ともいえるとても大切な友人たちです。左からSarah（マレーシア人）、私、Claudia（メキシコ人）、Jan（オランダ人）です。私が風邪をひいたとき看病をしてくれたり、ご飯を作ってくれたりと、本当に家族のようでした。よく夜中までコーヒーを飲みながら話をしたり、映画を見たりしたのも今ではいい思い出です。写真２に写っているのは、みんな現地の友人たちで、左からPaul、John、私、Rimaです。ニュージーランドの観光の穴場によく連れて行ってもらいました。このように私は、たくさんの友人たちに支えられたからこそ、楽しい留学生活を送ることができたのだと思います。

写真2

2つ目は、人生の道筋を決めるきっかけです。私は日本語指導のボランティア活動をしていたのですが、教えていた生徒の１人に言われた、「先生に向いてると思うよ。」という何気ない一言が、私に教師という道の選択肢を意識させてくれました。もしも留学していなかったら、今現在、教師という道を進もうとしていたかわかりません。

来年4月から、青森県で教師をすることになると思います。留学中に出会った人々だけでなく、今まで出会った全ての人たちの言葉や支えが私に影響を与え、今の私自身をつくってくれたと信じています。留学とは、そんな人たちとの出会いの幅を広めるよい機会であるといえるでしょう。

ボルドー2006
――大規模ストライキの現場より――

人文学部情報マネジメント課程　堀　夏実

2005年9月から2006年7月にかけての約10ヶ月間、私はフランスのアキテーヌ地方、赤ワインで有名なボルドーのボルドー第3大学へ留学していました。

留学の動機はいろいろあるのですが、一番の動機は海外へ行ってみたいという思いからでした。

語学に興味があるとか、フランスやヨーロッパに興味があるとか、そんなことよりまずは日本を出て、全く触れたことのない国の日常生活を体験してみたいという思いを高校生の頃から抱いていました。

一番仲の良かった友達、Caroleです。これはCaroleの家でパーティをしたときの写真です。

そういうわけで海外へ初めて出た私は、まずパリのシャルル・ド・ゴール空港でボルドー行きの電車（TGV）に乗り換えられず、駅のプラットホームで日本人観光客に助けられます。そして、電車の中では席がわからず車窓いっぱいに広がる緑の牧草地を眺めながらスーツケースと一緒に固まっていたところへ優しい韓国人の学生に助けられ、やっとの思いでボルドーへ着きました。

もともとフランス語は第2外国語と人文学部の外国語実習で履修していただけでした。フランスへ渡る前も向こうに行ってからなんとかなるさと軽い気持ちでいたので、ボルドーではほとんどゼロからのスタートでした。しかも、2005年・2006年はフランスでも珍しい規模でフランス国内の移民が起こした暴動やCPE（初回雇用契約）に対する若年労働者層が起こした大規模なデモ・ストライキが起こった年でもあり、デモ行進や学内・広場などを封鎖しているバリケードを直に見て体験することができ、とても印象深い10ヶ月になりました。

まず、着いてすぐの2005年10月にはフランス各地で建物の破壊、自動車の爆破など暴動が起こりました。パリ・マルセイユなどでは夕方5時以降外出禁止などの措置がとられていたほどです。ボルドーも例外ではなくバスの爆破

語学学校のクラスの人たち。これはそれぞれの母国料理を持ち寄ってピクニックをしたときです。

ボルドーを流れるガロンヌ川。建築物は古い建物の中だけを改築し使用しているので街並みは中世のものが数多く残っています。

ワイン蔵です。ワインを作っている所はシャトーと呼ばれ試飲もでき、いろいろなワインを飲むことができます。

が起こりましたが、ボルドーは比較的平穏だった都市でもあり、私がその事実を知ったのはバスの爆破から3日後でした。当時私は、トゥールーズへ旅行に行く計画を立てていたのですがトゥールーズも夜間は外出禁止だと知り旅行を断念しました。そのときバスの爆破よりトゥールーズへ行けなかったことで、この暴動に対する実感が出てきたことを覚えています。事実を自分で目の当たりにしないと、実感というのはなかなか湧かないものだなと思いました。

それに引き換え2006年2月から4月にかけてフランス全土で大々的に起こったCPEに対するデモ・ストライキ行動は実際に体験することになり留学生活の中でも最も印象深いものの１つになりました。

私はボルドー第３大学付属の語学学校へ通っていたのですが、ボルドーでのストライキの中心は第３大学だったので大学構内は封鎖され利用できるのは図書館だけという状況が約３ヶ月続きました。語学学校は別館だったのですが、大学構内で行われる授業もあり後半は偏った授業編成になってしまいました。CPEに対する集会やデモ行進も頻繁に行われており、バスも路面電車も止まり交通が一切停止するなど、日本で生活しているときは考えられないような、移動手段は自転車か徒歩という状態になったときもありました。

カフェでの１枚です。ここは食器が和風のものが多く可愛かったのでお気に入りのカフェでした。

しかし、そんな中でも周りの友人達（フランス人）は毎日学校の図書館へ通いきちんと勉強もしながら、夜はいつも集まるバーで飲んだり、日替わりでそれぞれの家でパーティをするなどしっかりと遊んでいました。

私がフランスへ行き一番素敵だと感じたのは、彼らの時間の使い方です。みんなそれぞれ自分の時間、友人と過ごす時間をとても大切にしていて、1日は日本と同じ24時間なのにフランスではとてもゆったりと時間が流れていくのを肌で感じました。日本は今、24時間対応･年中無休などとても便利な時代になっています。それに比べフランスでは夜7時以降ほとんど閉店となり、日曜・祝日は開いているお店の方が珍しいという日本とは逆の休日には休むという経営方針で買い物がしづらく日本よりとても不便です。しかし、その分彼らは時間の使い方を知っていると思いました。

私は交換留学という点ではあまり良い留学経験ではなかったかもしれません。しかし、一個人として今回運よくこのような時期に留学できたこと、フランスという国の悪い面を極端に感じることができたことは今後社会へ出るときに直接つながることはあまりないかもしれませんが、内面的に私がこれから生きていくうえで必ずプラスになると思います。初めて経験する異なった文化を全身で感じ、フランスと日本というそれぞれの国を客観的に見ることができ、改めてそれぞれの良さを発見することができました。

留学が珍しくない時代とはいえフランスへ送り出してくれた両親、指導教官、留学生センターの皆様に今回のようなチャンスを与えてくださったことに感謝を申し上げたいです。本当にありがとうございます。

最後に、留学を考えている方。留学って本当に一経験に過ぎないものです。人って意外とどこでもやっていけるものですよ。

亀ヶ岡文化研究センター

人文学部附属亀ケ岡文化研究センター長
文化財論講座　藤　沼　邦　彦

[はじめに]

「亀ヶ岡文化」とは何だろう、と思う学生・教員そして市民の方も多いと思います。なかには津軽地方の縄文文化をそう呼ぶのだと思っている方もおりますが、そんなことはありません。亀ヶ岡文化は、縄文時代の最後のころ、北海道の渡島半島から東北地方全体にかけて盛行した広域的な文化で、その文化圏の中心は東北北部にあったと見られております。縄文文化に属しますので、狩猟採集経済を基調としますが、他の時期と比べ、土偶や石刀、土版・岩版などの祭祀的な遺物、精巧な土器や漆器などの工芸的な遺物に彩られていることに特色があります。亀ヶ岡文化の影響を受けた遺物は、その文化圏をはるかに越えて、北は北海道北部・東部で、南は近畿・四国地方、最近では九州でも出土しています。四国の土佐市居徳遺跡から出土した亀ヶ岡式土器は、北上川中・下流域に見られる亀ヶ岡式土器にそっくりです。目の大きなことで有名な遮光器土偶は、兵庫県神戸市灘区でも出土しております。実年代でいうとおよそ3000年前から2700年前までの文化です。このころ北九州の一画に、食料生産経済を基調とする弥生文化が成立しますので、縄文文化の終末や縄文文化と弥生文化の接触の様子を探る上でも亀ヶ岡文化の研究は重要なのです。

[亀ヶ岡文化研究センターは学生からの発案]

青森県地方は、亀ヶ岡文化に関する遺跡に恵まれておりますが、多くの資料が県外に流出し、基礎的な研究が遅れておりました。そこで考古学ゼミナールでは、亀ヶ岡文化の中心地に位置する考古学研究室の責務と考え、亀ヶ岡文化の研究を重要なテーマとして取り上げておりました。

昨年（平成17年）5月、藁科人文学部長から「弘前大学の人文学部として地域に根ざした特色ある研究所やセンターを作ることができないか」との提案がありました。そのことを考古学ゼミナールで話したら、学生から「亀ヶ岡文化研究センター」をぜひ設置して欲しいとの意見がでました。そこで、亀ヶ岡文化の基礎的な研究を多方面（考古学･文化人類学･民俗学・美術史）から行い、学界に貢献するとともに、地域社会の活性化にも貢献することを目的に、「亀ヶ岡文化研究センター」の設置を提案し、認められました。

[亀ヶ岡文化研究センターのミニ特別展]

亀ヶ岡文化の遺物は極めて工芸的なものが多く、縄文時代を代表するものと言ってよいでしょう。ヨーロッパなど海外の展示会でも人気の高いものです。考古学ゼミナールでは、研究のため各地から出土品を借用して、実測図を作成し、研究を行っておりますが、学会などで弘前大学を訪れた各種研究者・文部科学省職員がしばしば立ち寄って、それらの遺物を見学していくようになりました。考古学者の坪井清足氏や芹沢長介氏がそうです。遠山文部科学大臣も考古学実習室で石刀などの遺物を手にとって見ていきました。試みに平成14年から15年にかけて、大学祭の期間に実習室を開放しましたら、のべ9日間に1300人の入場者（学生・教員・市民・高校生など）がありました。それだけ亀ヶ岡文化の遺物は人を引きつける魅力があるのです。

そこで亀ヶ岡文化研究センターでは、

導入部に展示した「笑っている」ような岩偶は、みんなの人気を集めました。

遠藤学長も来て下さいました。

弘大祭では、親子連れが目立ちました。

平成13年度卒業生の佐布環貴さん、其田香保里さんも来て下さいました。

研究資料や研究成果を展示する小展示室を設置し、特色ある展示活動も行うことにしました。まず最初に、研究センターの設置を記念して、ミニ特別展「亀ヶ岡文化の世界」を行い、東北大学考古学研究室などの協力を得て、亀ヶ岡文化の優品を多数集めて、公開しました。１月弱の会期中に1607人の入場者がありました。今年秋の展示は、北秋田市教育委員会などの協力を得て、ミニ特別展「森吉山麓の亀ヶ岡文化」を行い、1300人の入場者がありました。昨年の展示会の内容は、写真家の小川忠博氏のおかげで、美しい内容ある図録として発刊することができました。

［亀ヶ岡文化研究センターの研究活動］

亀ヶ岡文化研究センターでは、多方面から研究活動を行うことを前提としておりますが、実際には考古学系の教員と考古学ゼミナールに集まる院生・学部学生が中心となっております。今年は、十和田市教育委員会が所蔵する明戸遺跡の出土品を資料化し、『亀ヶ岡文化遺物実測図集３』として刊行する予定です。

なお、今年の夏は、亀ヶ岡文化研究センターに質の高い研究資料や展示資料を収集するため、三戸町杉沢遺跡の発掘調査を行いました。良好な資料を採集できましたので、常設展示で公開し、来年度は発掘調査報告書（研究報告第６集）を刊行します。シニア・カレッジの受講者は、整理作業中の杉沢遺跡の土器・石器を手にとって観察・勉強し、生まれて初めて本物の土器に触れることができたと言って、こちらがびっくりするほど感激しておりました。オープンキャンパスや体験入学、大学祭などで亀ヶ岡文化研究センターの展示を見た高校生から、弘前大学に入学して考古学を勉強したい、と相談されることも多くなりました。他大学などから弘前大学の大学院に行ってみたい、などの話もあります。

これからも亀ヶ岡文化研究センターは、津軽地方に所在するという大学の地の利を生かし、①亀ヶ岡文化の研究を行い、研究資料や研究成果を展示や刊行物の形で、広く公開する。②特色ある企画展を行い、「亀ヶ岡文化とは何か」について教育普及活動を行う。③学生・市民などが研究に参加できるようにし、学内や研究者のみならず地域社会の活性化に貢献できるような内容とする。④学術的な発掘調査を継続的に行い、日本有数の亀ヶ岡文化に関する弘前大学学術コレクションを作り上げる。これによって国指定クラスの出土品も自ずと集まり、全国の博物館・美術館に貸し出すことも可能となる。⑤その他、特色ある活動を行う、などの活動を考えておりますので、ご協力をお願いします。

展示室では、考古学ゼミ生が中心に解説を行いました。

10月28日に行った野村崇先生の講演会には、110名の人が集まりました。

人文学部 社会行動コース 紹介

前列左から　羽渕一代 助教授　　山口恵子 助教授　　曽我亨 助教授
後列左から　石黒格 助教授　　作道信介 教授　　丹野正 教授　　杉山祐子 教授　です。
山下祐介 助教授は都合で不在でした。

書物に埋もれて研究する。人文学部といえばそんなイメージが沸くかも知れません。けれどもわたしたち社会行動コースは「書をもって街にでかけよう」を 合い言葉に、これまで津軽のあちこちに出没し、人びとにお話を聞いたり、一緒に行事に参加したり、観察したりしてきました。そして自分たちの手触りをもとに、人生の経験を、地域のことを、そして津軽の心について考えてきました。書物のような２次的なデータではなく、みずからの手でつかみとった１次データをもとに考え抜くというのが、私たちのスタイルなのです。今年度は、８人の教員（社会学･人類学･社会心理学）の指導のもと、約50名の学生が４つの班にわかれて社会調査実習をおこなっています。それぞれの班の活動を、指導しておられる先生方にレポートしてもらいました。

津軽の人生について考える

羽渕 一代

「黒石よされ」にも参加しました（人生班）

「人生班」では、人びとの経験に注目したライフ･ヒストリー法を使って、黒石市の社会変容を調査研究しています。人びとに人生や過去の出来事など、経験を語ってもらうことで、ローカルな文化、社会構造の一端を理解することを目指しています。この黒石人生研究は、2005年度から継続しておこなっています。昨年は、重要伝統的建造物群保存地区である中町にある「こみせ通り」を調査地とし、本年から温湯温泉のある温湯地区を加えた二地点の調査をおこなっています。両地域ともに、観光のイメージの強い場所ですが、それぞれ固有の特性があります。そのため、詳細に観察するという社会分析の重要なスキルを養うための格好のフィールドだといえます。「人生班」の学生たちは、この両地区に住む人びとにインタビュー調査をおこない、お祭など地域行事に参加することによって、地域の特性、住民意識について理解を深め、社会分析の方法を黒石の方々の協力のもとで楽しく学んでいます。

仕事を通して街を読む

山口 恵子

わたしたち「仕事班」では、弘前のタクシー産業と仕事の変化について調査をしています。「なぜタクシー？」と思われる方も多いかもしれませんが、タクシー業はいつの世にも、時代の最先端のニーズをとらえた産業であり、また多くの人びとに働く場を提供してきました。つまり、その都市の変化をとてもよく反映しているのです。タクシーを通して弘前という都市をみる、そのような研究に今年度から取り組んでいます。調査は、タクシー会社の責任者の方やそこで働く運転手のみなさんへの聞き取りをしたり、弘前駅前や病院などタクシーが多く集まっている場所でタクシーの台数や乗客数をカウントする量的調査をおこなったりしています。仕事班の学生は、以前はそれほど関心を持ってタクシーという乗り物をみていなかったでしょう。しかし、実際に話を聞きにゆき、弘前の多くのタクシー会社が高度経済成長期前後に会社を創業していること、タクシーの運転という仕事がとても工夫に満ちたものであること、時代に応じて客層が変わってきたことなどに気づいてきました。実習を通して「あたりまえの日常」をみなおす視点をみつけています。

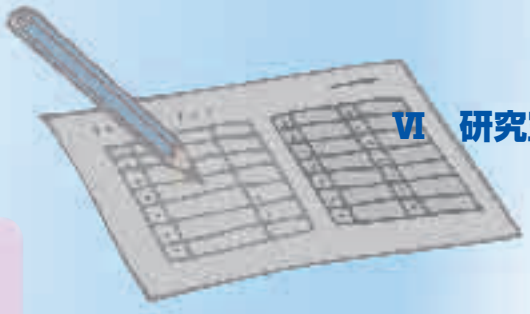
実習の成果をオープンキャンパスで発表しました（仕事班）

地域の楽しさを参与観察する

曽我　亨

ウグイの産卵場所をつくりました（実践！岩木川班）

「実践！岩木川」班では、その名のとおり岩木川でおこなわれている実践を、わたしたちみずからも実践しながら学んでいます。とくに今年はシゲタ漁に挑戦しました。シゲタ漁とは、春、産卵のために遡上するウグイを対象にした伝統的な漁法で、青森県だけでなく長野県（ツケバ漁）や栃木県（アイソ漁）、福島県（セノヨボリ漁）などでもおこなわれています。ウグイのために人工的な産卵場所をつくってやるのが特徴で、そこにやってくるウグイを投網で一網打尽にします。漁師さんと一緒にわたしたちも産卵場所つくりをさせてもらい、投網の練習をして漁に備えました。残念ながら増水のため、今年は一度も網を打つことができませんでしたが、この漁にあつまる皆さんと楽しいひとときをすごしました。このように実際に参加しながら観察をおこなう手法を、人類学では「参与観察法」と呼んでいます。インタビューではわからない人びとの経験を、自分の身体を手がかりに理解しようとする技法です。ヤマメやイワナ、鮭や鮎などとは異なり、ウグイは市場価値がほとんどない「下魚」ですが、ウグイ漁を一緒に体験することで、地域に埋め込まれた「生業経済」の重要性が浮かびあがってきました。見過ごされがちな地域の楽しさを発見するのが「実践！岩木川」班の目的です。



心を統計的に読み解く

石黒　格

「計量班」では、俗にアンケート調査とか統計調査、計量調査と呼ばれる調査法をつかって、課題解決にあたることを目指しています。今年の課題は青森県内の「若年者の雇用と就労」を、若年者の対人関係を視野に入れながら検討していくことです。他の班とは異なり、実際に大学の外にでていって、誰かに話を聞くという作業はありません。計量調査で捉えようとするのは県内の若年者全体の様相であって、個々の人物像ではないからです。その代わり「質問紙（いわゆるアンケート）」を駆使して、青森県内に在住する大量の若年者の「状態」や「考え」を調査しています。いかに質の高い「質問紙」を作るかが勝負のわかれめです。本や新聞などを読みこみ、議論をかさねて「質問紙」を作っていきます。アンケート調査がおわると、今度は分析が待っています。1,000件以上のデータを分析するために、回答を数値化するのが計量調査の手法です。入力から集計までは気の遠くなる作業の連続ですが、その先に、誰も知らなかった新しい事実が待っています。それを発見するのが「計量班」の魅力です。

大量のデータを入力し分析します（計量班）

Ⅶ　新任教員自己紹介

人文学部　思想文芸講座　講師
山　口　　徹

新入生より半年遅れの10月に赴任となりました。日本近現代文学を担当しています。「太宰･修司は津軽の生まれ」とは『奥の細道』さながら、旅立つ際に贈っていただいた連句の一句ですが、当地弘前周辺は近代文学の宝庫です。時代の若者をファッショナブルにリードした太宰や寺山、石坂洋次郎らを輩出する一方、きわめて硬派な言論人、陸羯南や秋田雨雀を生み育てた文化豊饒の地のこと、皆さんと学んでいきたいと思っています。

人文学部　公共政策講座　講師
福　田　健太郎

11月に着任いたしました。民法を担当しております。日本一暑い都市と言われる大阪に５年半住んでおりましたので（京都にも２年間）暑さにはずいぶん慣れましたが、今度は雪国の弘前で寒さに鍛えられることになりそうです。民法の領域では近年大きな改正が相次いでなされ、重要な判例も数多く出されています。そのような最新の動きを講義等でわかりやすく伝えられるよう努力したいと思っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

教育学部　社会科教育講座　講師
高　瀬　雅　弘

この10月に教育学部に赴任しました。社会学を担当します。仕事と趣味とを兼ねて、歴史のある町並みを歩くのが好きです。ここ弘前は、路上観察などで知られる「考現学」の産みの親であり、社会学にも大きな影響を与えた今和次郎さんの出身地でもあります。彼の原風景とでもいうべき津軽の地を、自分の足で歩いて、たくさんの人・モノを観てみたいと思っています。大学でしっかりと知を蓄えて、さあ、これから一緒に出かけましょう。

Ⅷ　けいじばんコーナー

合同企業説明会開催のお知らせ

～学生就職支援センターでは、平成19年２月13日と14日に合同企業説明会を開催します～

・原則として学部３年生、修士１年生を対象にしています。
・この外に、個別企業説明会や学部独自で開催するガイダンスもありますので、
　①学部就職用掲示物
　②学生就職支援センター就職用掲示物
　③本学HP
を、３点セットでチェック習慣を！

事 項 名	弘前大学合同企業説明会
日　　時	２月13日（火） 9:30～12:30　　13:30～16:30 ２月14日（水） 9:30～12:30　　13:30～16:30
場　　所	シティ弘前ホテル
備　　考	両日とも午前の部、午後の部に分かれ、全体で四部構成で行います。 参加企業は延べ約200社の予定です。

就職情報ホームページのアドレス
<http://www.hirosaki-u.ac.jp/shushoku/>

奨学金についてのお知らせ

奨学金については、すべて掲示でお知らせしますので、各学部・総合教育棟１Fの掲示に注意してそれぞれ期限内に手続きするよう注意してください。
窓口は学務部学生課学生生活支援グループ（医学部２年次以上は医学部医学科学務グループ）です。
奨学生の募集は、日本学生支援機構・その他の団体とも原則として４月です。
19年４月からの奨学金を希望する人は、19年３月末からの掲示に注意して、期限に遅れないように申し込んでください。

日本学生支援機構奨学金

○　緊急採用・応急採用について
大雪、長雨、台風、竜巻などにより被害を受けた地域の学生や、家計支持者の失職・死亡等の急変により修学が困難となった学生について、奨学金の緊急採用・応急採用が可能です。窓口で相談してください。

○　現在奨学金を貸与されている皆さんへ（平成19年３月満期者を除く）
次の事項は現在手続きを受け付けています。
「奨学金継続願」
「パスワード」を配布中です。期限内に必ず受け取ってください。
○「特に優れた業績による返還免除」申請について
平成19年３月満期予定の大学院第一種奨学生を対象として、申請書類を１月配付予定です。詳細は掲示をご覧ください。

2007年３月卒業・修了する皆さんへ

皆さんの就職先、進学先が内定されましたら、学生就職支援センターへ**内定報告書を提出してください。**

― 内定報告書の取扱いについて ―
提出されました内定報告書は、本学の就職状況調査・報告の作成及び文部科学省、青森労働局、弘前公共職業安定所への就職状況報告のために利用されるもので、それ以外の目的に利用されることはありません。
また、提出されました内定報告書は、全て統計処理され個人名が特定されるようなことは一切なく、内定報告書を提出した皆さんに御迷惑をおかけすることはありません。

Ⅸ　編集後記

暑かった夏が終わり、短い秋をやり過ごし、今年もまた厳しい冬を迎えました。雪の降らない地域から初めて雪深い弘前に来た方々は、寒さや歩きにくい雪道に苦労していることでしょう。四季の移り変わりに感動すると共に、弘前の四季を楽しみたいと思います。
さて、学園だより153号をお届けします。特集で「現在の弘大・弘大生について－職員の視点から－」を企画しました。これまで学園だよりは教員や学生が書いた記事を中心に掲載してきましたが、事務職員等の視点から見た弘前大学はいかがでしたでしょうか。
多くの立場からの意見を公表し、その考えを共有することが、今後の弘前大学の発展に欠かせないことだと思います。学園だよりに限らず、いろいろな場面で職員の活躍を期待します。

（S.O）

弘前大学　学園だより Vol. 153
2006年12月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail　jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

弘前大学
「学園だより」編集委員会
委員長
　氏家良博（教育・学生委員会）
委　員
　渡辺麻里子（人文学部）
　太田誠耕（教育学部）
　松谷秀哉（医学部医学科）
　稲葉孝志（医学部保健学科）
　遠田義晴（理工学部）
　浅田武典（農学生命科学部）
　笹森利通（学生課）
　石岡勝彦（学生課）
印刷：やまと印刷㈱